川崎巨泉筆

起上小法師畫集

第十集

木戸達磨堂藏版

第二十八圖

（一）　栃木の達磨（張子製）　毎年新舊一月十三日の初市に賣出さる。目無達磨にて、色の黑きと鼻の大なるとを特徴とす。恐くば天下第一の大鼻達磨なるべし。それも近來は年々低くなる傾向あり。色の黑きも薄らぎて、稍男振を上げしが、そは豐岡產美男達磨（第一圖）の侵入を防がんが爲めにして、玩具社會にも生存競爭は免がれざるものと見ゆ。前面の袋模樣は礬水にて描き、其上に金粉を振りかけしものなり。小形なるはアルミユニウム泥にて描けり。衞生上無害玩具たらしめんが爲めなり。

（二）（三）（四）（五）（六）　鴻の巢の達磨（ねりもの）　いづれも小形なり。目有と目無とあり。目無とても緣起物として需用せらるゝは少く、主として小兒の玩具に供せらる。張子製よりも丈夫なれば、遠方へも盛に輸出せらる。故に石達磨の稱あり。（三）は耳付なり。（六）は抱き達磨と云ひ、三月節句に多く賣出さる。此地には張子の達磨も製造せられ、一月四日鴻神社境內の初市に緣起物として賣出さるゝが、越ヶ谷邊のものと大差なく、同地及び豐岡產の達磨に壓倒せられ、近來は殆んど石達磨の領域のみを固守するに至れり。

（七）　水戸の達磨（張子製）　此地方にては達磨を緣起物とする風習殆んど無し。圖示せる（一）は實物より少しく小く、他は實物大なり。

第二十九圖

（一）（二）（三）　陸中花卷の達磨（土製）　花卷人形として世に知らる。製造元は苗代澤と云ひ、斯業に從事してより已に數代に及ぶとぞ。舊三月節句前に數多の行商によりて賣り弘めらる。いづれも底明きなるを紙にて貼り塞ぎたるが特徴なり。後半部の白き儘なるは、其源流伏見人形と同系と屬す。前面の花模樣も亦人目を惹くに足る。

（四）（五）　仙臺の達磨（張子製）　（四）は古製なり。（五）は關東の目無達磨の風貌に酷似せるが、必點睛しあるを異なりとす。（第二圖參照）此圖に示せる（一）は實物より稍小く、他は實物大なり。

第三十圖

（一）　鳥取の達磨（張子製）　毎年一月二日初賣の時達磨を二つ買ふを常とす。一は稍大なるを、一は稍小なるを選ぶことあり。夫婦に擬せるなり。又は家內の人數だけ買ふもあり。（一）に見る如く顏面の著しく凸出せるが其特徴なるも、今は絕種となり、顏は追々平くなり、それすら大阪製の輸入品に壓倒せらるゝに至れり。（二）はねり物なり。

（三）（四）　伯耆倉吉の達磨（張子製）　舊正月十八日長谷寺十一面觀音の緣日に初市として賣出さる。三月節句に雛に一つ添へて買ふを例とす。又天神を人に贈るとき、一つにては數惡しとて必之れに達磨一個を添ふる習慣あり。（三）は名古屋產に、（四）は大阪產に類するも、多少變形し居れり。

（五）（六）　米子の達磨（ねりもの）　此地のものは糸屑を用ひ肉厚にて丈夫なり。緣起物としては大阪製の小達磨を用ひ、其習慣倉吉に同じ。斯くの如く數の二つを緣起よしとするは伯耆地方共通の風俗なるべし。

（七）　對馬の達磨（木製）　海神社より授與し、船內に祝らる。圖示せるはいづれも實物大なり。

大正十四年二月

木戸忠太郎記

大正 14.3.4 內文

六
二
五
七
三

大正十四年三月　一日印刷
大正十四年三月　五日發行

畫者　川崎巨泉

京都市上京區土手町夷川上ル
末丸町二百八十四番地
編輯印刷兼發行者　木戸忠太郎

京都市上京區土手町夷川上ル
發行者　木戸忠太郎
電話上一一九九・振替口座大阪六八五九九